

profile

よねおか・まなみ●1986(昭和61)年、愛知県生まれ。祖父が大工だったこともあり、幼い頃から建築に興味を持つ。大学で所属した研究室の影響を受け、本格的に建築・設計の道へ。2010年日本国土開発(株)へ入社、設計部に配属され、現在に至る。



米岡の所属する東日本建築事業部の設計部は13人のチーム。若手社員も増えてきた。

「鳥の眼、虫の眼、魚の眼。良いものをつくるためには、様々な視点が必要である」。これは、米岡が仕事において、常に意識している心構え。大学・大学院時代に、師匠である研究室の教授から教えてもらったことだ。

米岡が所属していた建築意匠の研究室は、手厚く熱心な指導が評判で、そのことは米岡自身、「キツいなって気持ちで、眠れない日もありましたよ」と振り返る。何が米岡にとって、それほどまでにキツかったのか。それは、彼女の作るものに対する、師匠からのフィードバックがいつも「その通り」だったからだ。

設計する上での課題や、建物・土地の歴史的背景はきちんと考えたのか。そのデザインに対する必然性は説明できるのか。独りよがりな視点での設計となっていないか――。

指導がある度、自分の未熟さや設計の難しさと闘わなければならなかった。しかし、それで

眠れないくらいキツかった
師匠からのダメ出し

就職して、実務を担うようになると、知識やスキルはどんどん伸びる。しかし、仕事に対する想いやスタンスは、もしかしたらそれよりもずっと前に醸成されているのかもしれない。「自分の原点は学生時代の研究室だ」。そう語ってくれているのは、設計の米岡真奈美さんだ。

特筆すべきアピール力
積極性が彼女の強み

米岡は建築が好きだった。真剣に、楽しそうにデザインや建築を語る師匠の姿に憧れて「自分も」と前に進もうとしていた。

「会社に入ってから学んだことも、もちろんたくさんあります。でも研究室で教えてもらった姿勢や考え方がなければ、今の私の成長もなかったと思うんです」

日本国土開発(株)の採用試験の際に、米岡の面接を担当した設計部の前田意匠部長は、現在では米岡の上司。採用面接のことを、今も鮮明に覚えているという。

「他の学生さんがファイリングしたポートフォリオだけを持ってくるなかで、彼女だけがわざわざ巨大な模型を持ってきてくれました。『私の作品を見せてくれ』と言わんばかりの顔で。作る力だけではなく、自分をアピールする力も多分に持ち合わせている方だなと、とても印象的でした」

そう思い出されるほどに、前のめりだった米岡。入社一年目には、一級建築士の資格も取得。彼女の熱意と努力は、在学中も、就職後も、変わることはなかった。これまではあまりなかったような、ビタミカラーを基調とした複合福祉施設。施主だけでなく、地域団体や関係業者の様々な意見を対立させることなくまとめ、

輝け! けんせつ小町

意匠設計

米岡 真奈美

日本国土開発株式会社
東日本建築事業部 設計部 意匠担当主任



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



my Beginning

私が建設業に入った理由

学生時代の“師匠”との出会い



所属部署では積極的に、設計に使える新しいツールを取り入れている。そういった前向きな姿勢も、米岡たちの大きな武器だ。

my style

私生活は2歳になる息子の育児が主です。イヤイヤ期真ただ中で振り回されていますが、仕事を終えてお迎えに行くと笑顔で迎えてくれて、1日の疲れが吹き飛びます。ダンボール1つあるだけでそれが椅子や机になったり、中に入って遊んだり、いろいろなものに興味を持って遊ぶ姿をみて、仕事面でも気付きを与えてくれます。



年末はハウステンボスへ。写真は変なホテルを探索中。

「いろいろな人の想いを、設計で昇華する役割を担いたいです」
 建物をつくるときには、多くの立場から多くの人の思惑が交錯する。施主の考え、現場の想い、実際に建物を使用する人の視点。またその地域の住民や、そこにある企業への影響など、すべての人の望みを、そのまま建物に反映させるのは、難しいことなのかもしれない。それでも考えを集約させて、アイデアをジャンプさせて、ベストなものを提案する。様々な立場の、多様な視点を意識して、ひとつの形にする。それが米岡の考える理想の設計士の在り方だ。この理想を胸に、米岡は多くの人々から愛される建物を、これからも設計していくことだろう。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと